

ともに 1 日 500 cc 使用した。そして Dx. 使用量と出血率をみると低分子 Dx. 1500~2000 cc 使用群 379 例中 28 例に出血が見られ、出血率は 7.4% にも上っている。また、対照群である Dx 非使用群 328 例中、出血したのはわずか 1 例で出血率は 0.3% である。

次に Dx を使用した 530 例中、252 例の 47.3% に術後痒痒感が認められた。この痒痒感は Dx 使用後 2~6 週ころより発現し、1 カ月から数カ月間持続するもので、入浴就床等の温暖刺激などにより全身に発現する。この痒痒感と肝機能およびアレルギー体質との関係はない。ゆえに胃切除に際し、不用意に Dx を使用すべきではないと思われる。

57. 削岩機による発生例を含む 腸石 (肺石) イレウスの 3 治験例

山野 徳雄 (愛媛県立南宇和病院)

症例 1. 68 歳男。1 年前より胃症状あり、削岩機を腹にあてて 2 時間仕事をおこなったところ腹痛が現われ、しだいに強くなり、嘔吐も起こる。

空腸に結石あり、この結石の性状より精査して胃にも結石があった。胃石も腸結石も $3 \times 3 \times 2.5$ cm で 13 g と 12 g の大きさで、初めは 1 つのものが削岩機の振動で割れたものであった。シブオール陽性。

症例 2. 11 歳男子。腹痛と吐気および腹部膨満。回腸に結石あり、 $3.5 \times 2.3 \times 2.0$ cm 5 g シブオール陽性。

症例 3. 6 歳女子。腹痛、嘔吐、移動性腫痛空腸に結石あり $4 \times 3 \times 3$ cm 12 g. シブオール陽性。

以上 3 例のうち 1, 2 は柿が好物である。3 例とも白血球増多あり、腹部単純撮影で小腸にガスがたまり多く、さらに症状が激しくないことが特長であった。

58. 最近経験した 2, 3 の興味ある症例について (胃良性腫瘍、胆道疾患)

○高橋 康, 大山 修身
(熊谷協同病院)

症例 1 は、57 歳の男で術前 X 線診断では、良性粘膜下腫瘍と診断されたが、摘出標本では、胃前庭部前壁の筋層から粘膜下に増殖している胃血管腫の症例であった。

症例 2 は、50 歳の女で嘔吐を主訴とし X 線診断で十二指腸球部の polyp と診断されたが、摘出した標本から、十二指腸前壁の粘膜下嚢腫であった。

症例 3 は乳頭膨大部癌で腫瘍摘出術施行後特異な経過をとった例であった。

症例 4 は、51 歳女で、胆石症の診断で胆嚢摘出術後合併症を併発し最後に瘻管空腸吻合術を施行して全治さ

せた症例である。

以上 2, 3 の臨床的に興味ある症例についてその経過を中心に報告した。

59. 同種血症候群の排除を目的とした、わたくしどもの Compact disc oxygenator について

○田宮 達男, 堀部 治男, 西沢 直
(国立千葉病院)

わたくしどもは一連の基礎的実験により、血液の長時間非生理的酸化により生じる血球、血漿間の膠着反応が、同種血の存在下でさらに高進し、これが同種血症候群をもたらすことを明らかにした。このことよりも同種血充填量の消滅はきわめて重要である。最近無血充填法が抬頭してきたが、これらはいずれも気泡型人工肺を使用したもので、長時間灌流を要する場合には問題が多い。わたくしどもは血液破壊の少ない円板型人工肺を Compact 化することにより無血充填を可能とした。これにより体重 30 kg 以上の者では原則的に無血、それ以下でも 100~300 cc の充填血量で 2 時間余の体外循環が安全にできるようになった。この最大の臨床的特長は進行性低血圧や重篤な腎臓傷が影を潜めたことで、Fallot 四徴症根治術、弁移植術、肺高血圧を伴う中隔欠損症や乳幼児の開心術の成績が飛躍的に向上した。この Compact circuit system 採用以来 107 例の開心術症例の死亡率はわずか 3% である。

60. 最近一年間に経験した胃早期癌 10 例について

○新井洋太郎, 軽部 達夫, 新井嶺次郎
(新井病院)

昭和 42 年 10 月 1 日より昭和 43 年 9 月 30 日までの 1 年間に当院で手術を行なった胃疾患は 202 例であり、胃癌は 47 例であった。胃癌症例のうち早期癌は 10 例で胃癌全例に対する比率は 21.3% であり、男女比は 5:5 で同率であり、年齢は 35 歳から 61 歳までで平均年齢は 51.5 歳であった。病巣の大きさは直径が 1 cm 未満のもの 2 例で、9 例までが 4 cm 未満のものであった。組織学的所見は 1 例 C. simplex であったが、ほかの 9 例は ad. carcinoma であった。内視鏡的分類では II. を主病巣としたものが多かったが I 型のものも 2 例あった。胃ポリープの手術症例は 19 例なので、ポリープ全体に対する I 型早期癌の比率は 10.5% であった。10 例のうち何らかの自覚症状を訴えて来院したのは 8 例で、ほかの 2 例は、集検で疑いをもたれた 61 歳の女性と、自分の息子が胃癌で手術をうけたので念のため胃透視をうけて発見された 60 歳の男性であり、この 2 人は